

DHCの「オリーブバージンオイル」について。

翻訳会社として一応の成功を取めたあと、50人ほどの社員を眺めながら思いました。これでは、これからもずっと三流会社のままで、資金繰りに追われ、悪戦苦闘が続くんだろうな・・・自社ビルなど夢のまた夢だな・・・と。所詮、受注産業という商売では堅実ではあっても大きな売り上げ大きな利益は望めません。ばくちではあるが、イチかバチか勝負に出ようと決心し、マスプロダクションに転身することにしました。自然派化粧品が日本にはまだ育っていないとわかり、いろいろと手探りで調査をしているとき、岡山の田舎で細々とオリーブオイルを個人で研究されている老科学者に出会い、オリーブの奥深さに驚愕し、そこから本格的な調査研究が始まりました。そのころオリーブオイルは商社がスペインから輸入していて、それを小売業者に小分けで販売しているものが主流で、オイルそのものはまずまずといった品質なのですが、どうしても世界の最高品質のものに比べると劣るのではないかと悩んでいました。小豆島産のオリーブオイルもありましたが、日本は梅雨のシーズンもあり、年間を通して降雨量がとても多いためオリーブの実に虫が入り込んでしまい、化粧品としては全く使えないというのが世界の常識でした。私は何としても世界一のオリーブを探し出そうと、単身スペインにわたり、スペインの一流どころのオリーブオイル製造所を一軒一軒訪ねまわりました。有名なオリーブ畑の持ち主は代々引き継がれていて伝統も古く、多くが貴族の家柄であるため、その跡継ぎ社長は英国の大学で教育を受けています。英語が堪能なのが普通でした。私は過去に英語の通訳をしていましたので、意思の疎通には何の不自由もありません。そこで、今現在も取引が続いているNUNEZ DE PRADO社の社長パコさんに出会い、すっかり意気投合することになりました。パコさんはオックスフォード大学を出たインテリです。彼曰く、「正直に言うけど、日本へは最も悪い品質のものを輸出していて、最高品質のオイルはほとんどフランスへ回している。日本は商社の人間が買い付けに来るが、英語が下手で意思の疎通がうまくいかない。高いとか安いとか数字の話はするが、そこから深い話ができず友人になれない、何を送っても文句も何も言ってこない。その点フランス人はスペイン語でべらべらとよくしゃべり、品質にも実にうるさい。だから一番良いものはフランスへ、二番目はアメリカへ、三番目はイタリア、ドイツへ、最後が日本を含むその他の国へ送ることにしている。」とのことであった。実に正直な人であった。二人とも同じ年齢でその時はまだ若かったので、深夜まで話し合った。私のあまりの真剣さに押されて、パコさんは最後に静かに言った。「よくわかった。私はMr.吉田が心から気に入った。君のために最善を尽くそう」と言って、私の手を強く握ってくれた。今までどこの会社にもやったことがないが、最高品質で自家製としてしか使用しないものをDHCにだけ送ってあげようと約束してくれた。その約束は40年も経た今も続いている。オリーブは最初に大きな石臼でざっと砕き、砕いた実を電動式の重しで圧搾する。それを「一番搾りのバージンオイル」という。それからその搾りかすを温めて、さらに圧搾して搾る。「二番搾りのオイル」である。DHCのものは、一切搾らず、最初に石臼で砕いたときに白の下からポトリポトリと滴り落ちるオイルだけを使用している。一番搾りの前のオイルで、スペインでは Flor de Aceite (フロール・デ・アセイテ Flower of Oil)「オイルの華」と呼んで、とても珍重されている。店には置かず、自家用として使っているものである。本当に貴重なオイルである。DHCでは「DHCバージンオイル」にも「DHCディープクレンジングオイル」にも、それだけを使用しています。他社製品と比べて圧倒的な違いがあるのはそのせいです。その実力をお試しく下さい。バージンオイルはスペインでは万能薬と言われており、どんなものにも驚くほどの実力を示します。私は40年間、化粧品はDHCの「マイルドソープ」、「マイルドローション」、「バージンオイル」だけ。80歳になった今、顔にはシミ一つありません。眼がしらにできた老人性いぼは、指先につけたバージンオイルで静かにこすっているうちに、いつの間にか消えてしまいました。